

ala まち元気プロジェクトレポート2012

まち
元気



M A C H I - G E N K I - R E P O R T



もつと市民へ
もつと地域へ
アーラの主軸
まち元気プロジェクト

元気なまちづくりとは何か。それは“市民が元気なまち”をつくることだとアーラは考えます。人々が出会い、思い出を共有し、お互いを理解する。そこから新しい絆と活力が生まれてきます。

高齢者、子ども、外国人、障がい者といった様々な人々が住むこの可児市で、アーラは文化芸術の持つ力で市民に元気と明日の希望を届けています。

社会機関としてのアーラへ、そして「人間の家」へ。

可児市文化創造センター館長 兼 劇場総監督 衛 紀生

今年2月に名古屋で開催された世界劇場会議国際フォーラムには国内外の劇場関係者が集いました。そこで論議の中心となったのは、「公共劇場」とはどのようなものなのか、ということでした。別の言い方をすれば、公的な資金によって運営されている劇場は、どのような使命をもって運営され、どのような地域社会を実現すべき社会的役割を持っているかということです。

日本と非常に似通った行政風土と社会環境の英国から3人のゲストスピーカーが招かれました。英国芸術評議会の演劇ディレクターであるバーバラ・マシューズ女史、英国地域劇場界随一の経営手腕と評価されているマギー・サクソン女史、英国最大の活動規模を誇る地域劇場 ウェストヨークシャー・プレイハウスの最高経営責任者シーナ・リグレイ女史です。日本からは全国公文協の副会長で静岡グランシップの館長 田村孝子さん、日本一小さな公立劇場である島根県のしいの実シアターの芸術監督 園山土筆さん、それに私が基調講演を承りました。

日本においては、いくら公的資金を使っていようと、それに

対する自覚の疑われる劇場ホールが非常に多くあるのですが、英国のスピーカーたちは声を揃えたように公共的使命をいかに果たす社会的責任があるかについて言及していました。彼女たちは、その会議の前日にアーラを視察していました。そして、驚きの声をあげていました。とくに「アーラまち元気プロジェクト」が2011年度で年間354回も行われていることに強い関心を示していました。コミュニティ・プログラムの実施が多いとされている首都圏の劇場の約3倍の回数です。

私たちアーラは地域に貢献する「社会機関」であろうとしています。そして、すべての市民が心の翼を休めることのできる「人間の家」でありたいと考え続けています。公共的な劇場の先進国である英国のスピーカーたちの言っていた「社会的責任」を果たす機関であろうと、いままで経営してきました。そして、これからも可児市の未来の一点を凝視して邁進していくことになります。「社会機関としてのアーラ」、芸術の殿堂より「人間の家へ」。私たちの視線は決してブレません。そしてその眼差しは「未来」を約束していると信じています。

もくじ

M A C H I - G E N K I - R E P O R T



P 5 - 8

劇場を飛び出して、まちじゅうに

P 9 - 18

体験する楽しさ × 仲間との学びあい

P 19 - 26

みんなで一つの作品を創り上げる喜び

P 27 - 30

絆の大切さを知る

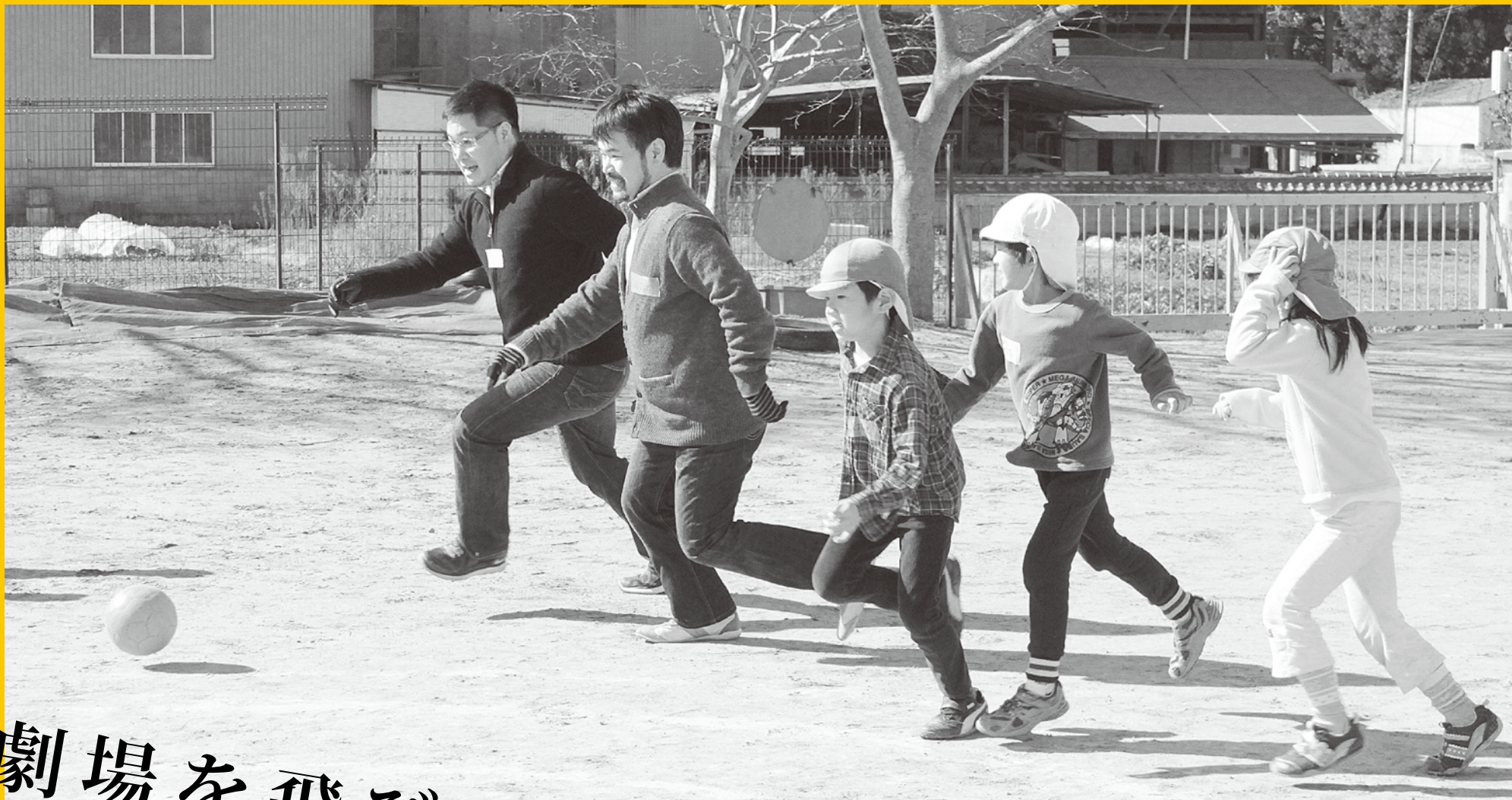
P 31 - 33

ala まち元気プロジェクト 新聞掲載記事
新聞掲載記事一覧

P 34

パートナーグッズ紹介
2012年度 実績報告





劇場を飛び出して まちじゅうへ

劇場に足を運ぶことができない人にも文化芸術を届けたい。そんな想いから病院や福祉施設、宅老所など、まちの様々なところに出かけていきました。身近な場所で聴く一流の音楽や朗読。普段、文化芸術に接する機会のない人が初めて体験する感動。数多くの出会いの中で、「アーティスト」と「観客」という垣根を越えた「心の交流」が生まれました。

- ・新日本フィル おでかけコンサート
- ・ala おでかけ朗読公演
- ・ホームカミング「家においで！」



新日本フィル おでかけコンサート

劇場に出かける機会の少ない方々に、素敵な音楽体験を届けようと新日本フィルハーモニー交響楽団と協力して、様々なところに出かけています。

- 11/2 子育て支援センター グリーンベア 童思館 約 45 人・春里公民館 約 140 人
- 11/3 高齢者・障がい者の交流会「ひだまり配達人」(今渡公民館) 約 45 人
- 2/11 きらきらぼし子育てサロン 約 40 人
- 2/12 広見小学校 約 140 人・ふれあいの里可児 約 35 人 延べ 445 人

アーティスト：新日本フィルハーモニー交響楽団

11 月 / Vn 竹中勇人、Vn 宗田勇司、Vla 矢浪礼子、Vc 多田麗王
 2 月 / Vn 堀内麻貴、Vn 佐々木絵理子、Vla 成田寛、Vc 上森祥平



素敵な音楽との出会い、まちじゅうに届け！

今年度は 11 月と 2 月に合計 6 カ所で新日本フィルのメンバーによるおでかけコンサートを開催しました。

グリーンベア 童思館では、重度の知的障がいや身体障がいのある子どもたちも含め、普段座ったまま音楽を聴き続けることが難しい子どもたちが、新日本フィルの奏でる生の音色に熱心に耳を傾け、歌詞カードも見ずに演奏に合わせ元気な声で歌う姿が見られました。この普段とは違う様子に施設スタッフの方も感動されていました。春里公民館では演奏後の「ふれあいタイム」で来場者が楽団員に質問をしたり、実際にヴァイオリンを弾くコーナーも設け、楽団員が小学生や中高年の方に手ほどきをするなど、和やかな時間となりました。また高齢者や障がい者の交流会 ひだまり配達人(今渡公民館)にも一流の音楽をお届けし、演奏後には、交流会を設け楽団員とお茶菓子を片手に会話を楽しみ「想像以上に楽団員が気さくに話してくれてうれしかった」という声があがるなど、これまで文化芸術との距離が遠かった方たちとの距離が縮まったようでした。

演奏だけじゃない、 人と人とのつながりを生むアウトリーチ

今回のおでかけコンサートでは、高齢者や障がい者をはじめ、自ら劇場に向き、文化芸術に触れる機会をあまり持てない方たちが、生の音楽を体験し、元気になる場を作ることができました。同時に、来場者たちの生の反応を見ることで受け入れ側の施設職員の方たちの文化芸術の力に対する意識が変化するきっかけにもなりました。また音楽だけでなく、楽団員の人柄が感じられるようトークを入れたり、演奏後の交流会を設けることで「音楽を通じた人と人との交流」に発展させることができたと思います。楽団員からも、「知的障がいの子どもたちが、すぐにクラシックの旋律を暗記して歌っていた姿にとっても驚いた。来場者から元気をもらった」と嬉しい感想を聞くことができました。

今回、単に一流の音楽を届けるだけでなく、楽団員と来場者の交流を設けることでより効果的に一人ひとりの感動の質をあげることができたと思います。今後も“つながる”ことを重視したアウトリーチを進めていきます。



ala おでかけ朗読公演

文学座の俳優が笑いあり、涙ありの朗読で市民に元気をお届け。
今年度は4つの公民館と連携し、「朗読落語」をお届けしました。

10/11 帷子公民館 61人・桜ヶ丘公民館 34人

10/12 広見公民館 33人・兼山公民館 35人 延べ163人

アーティスト：塾一久（文学座）

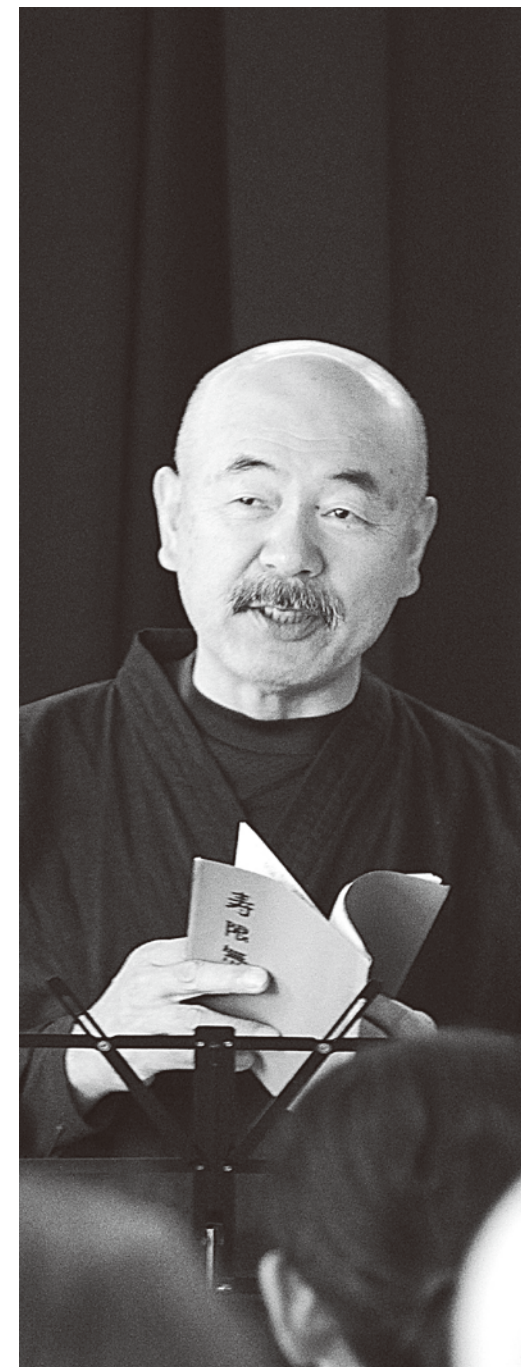
笑いの宅配大成功！

毎年恒例の「ala おでかけ朗読公演」。今年度は昨年度の父と母への想いを綴った手紙の朗読から趣向を変え、文学座俳優 塾一久さんが読む落語の世界を可児市内4つの公民館にお届けしました。

朗読落語…？聞き慣れない公演タイトルに来場者の反応を心配する声もありましたが、公民館それぞれで実施した広報宣伝の効果もあり、当日はたくさんのお客様をお迎えすることができました。さて、塾さんが朗読した演目は、なが一い名前の早口言葉が有名な「じゅげむ」。それから、さえない役者が笑いとおちょっぴり切なさも誘う「きゃいのう」の2本でした。テンポ良く飛び出す言葉と役者ならではの豊かな表情に会場からは、大きな笑いと感心の声があがりました。

「顔のしわがふえた」、「久しぶりに涙を流して笑った」と思う存分笑って楽しんで頂いた朗読の後は、こちらも恒例となっている出演者を囲む交流会。公演後のリラックスした雰囲気が自然と会話を弾ませ、笑顔いっぱいの和やかなひと時になりました。舞台と客席ではなく、同じ机を囲んで笑った時間は、来場者だけではなくアーティストにとっても充実したひと時になったようです。

来場者の中にはアーラまでは足を運ぶことができないという方も多くいらっしゃいました。アーラに来ることができなくても、アーラの催しを楽しめる。そんな機会を増やし、可児市の隅々まで笑顔の宅配便を届けていくこともアーラの一つの使命と感じています。





ホームカミング 「家においでよ！」

新日本フィルハーモニー交響楽団の楽団員が、音楽ではない普段の生活の中で、市民と触れ合うことで、クラシック音楽や演奏家を身近に感じていただくことを目的としています。

3/4 久々利保育園

参加：サッカー／年長の園児 22人 演奏・おやつ／全園児 約100人

ゲスト：Vn 田村直貴（新日本フィルハーモニー交響楽団）、Pf 田村響

プロの演奏家と心の交流を

まず演奏家と園児たちの距離を縮めるために真剣勝負のサッカーを行いました。運動場を目いっぱい使い、ボールを追う子どもたちと今回の訪問者である田村兄弟は年齢の差も感じさせないほど意気投合し、大きな声で笑いあいゲームをしました。年少、年中さんクラスの声援が響く中、久々利保育園の運動場にはとてもあたたかい時間が流れました。

サッカーの後は、田村兄弟による演奏。子犬のワルツを始め、本格的なクラシックから「となりのトトロ」の『さんぽ』などの多彩なプログラムに子どもたちはじっと耳を傾け、大きな声で歌ったりしていました。強弱や速度の変化が目まぐるしいモンティ作曲のチャルダッシュでは、子どもたちは目をきらきらさせ、体全身でヴァイオリンが奏でる様々な音色を感じているようでした。園の発表会で歌った「世界がひとつになるまで」の合唱では、聴いている側が元気をもらうような弾む歌声を披露してくれました。

子どもたちの素直さに触れ、心があたたかくなる訪問となりました。また、子どもたちにとっても、一緒に遊んだお兄さんたちが披露してくれた美しい音色はいつまでも思い出に残る、そんな「家においでよ！」でした。



音楽には新しい扉を開く力がある

今回の演奏家の1人、ピアニストの田村響さんが「家においでよ！」の数日後に、アーラでのコンサートを開催していたのですが、なんと公演当日、1人の園児とその親御さん、保育園の先生たちがアーラに来てくれました。ホームカミングでの演奏家との交流がなかったら、劇場までクラシックコンサートを聴きに来ることはなかったかもしれません。これは嬉しい出来事でした。

体験する楽しさ × 仲間との学びあい

初めての方でも気軽に体験できたり、一流の指導者から学ぶことのできるワークショップや講座を実施しました。参加者が得たものは、スキルだけではありません。時には童心に帰って遊び、笑い合い、時には互いに切磋琢磨し、新しい発見やたくさんの楽しい時間を共有した“仲間”は、きっとかけがえのない強い絆で結びついたことでしょう。

- ・平田オリザの「対話を考える」モデル授業
- ・プロの俳優による朗読ワークショップ
- ・演劇っておもしろい！プロから学ぶ演劇塾 2012
- ・歌舞伎とおしゃべりの会
- ・アーユースシアター「演ゲキッズクラブ」
- ・森山威男ドラム道場
- ・町が元気になる処方箋
- ・新日本フィル 音楽クリニック



平田オリザの 「対話を考える」モデル授業

現代におけるコミュニケーション能力とはなにか、演劇の手法を取り入れたワークショップを通して学びます。

8/6 ala 演劇ロフト

参加：可児市内小中学校教師 30 人

講師：平田オリザ

実感することの大切さ

今年度も演出家の平田オリザさんを講師に迎え、コミュニケーションについてじっくりと考えるワークショップを実施しました。このワークショップは今年度で5回目。可児市内小中学校の先生を対象に、教育現場とは違う、演劇という視点からコミュニケーションを考え、教育に生かせるヒントを持ち帰っていただきました。

ワークショップは、たっぷり5時間。はじめは、簡単なゲームを行い、少し慣れてきたところで、短いシナリオにアドリブや間を入れて自然な会話を演じるというプログラムも行いました。自然な会話を演じるというのは想像以上に難しく、不自然なアドリブに会場は大笑い。普段意識しない会話が複雑に構成されていることを実感し、「目からウロコ」の参加者も多かったのではないのでしょうか。



小さなヒントから開ける世界

平田さんは「みるみるコミュニケーション力が上がる特効薬は存在しない」といいます。このワークショップも特効薬ではなく、日々のコミュニケーションのちょっとしたヒントになるものなのでしょう。しかし、このワークショップを見ていて、小さなヒントから大きな世界が開けてくるように予感するのも事実です。参加者アンケートにも、「視野が広がった」、「新しい引き出しが増えた」という声がありました。

子どもたちのコミュニケーション不足が問題になっている今、このようなワークショップを続けていく必要性を強く感じています。



プロの俳優による 朗読ワークショップ

子どもたちの表現力・想像力を伸ばす絵本の読み聞かせ。効果的な方法を体験し、現場で生かしてもらえよう、幼稚園と保育園で働く方々を対象に実施したワークショップです。

2/8.9.15.16 ala レセプションホール

参加：51人

講師：金沢映子（文学座）



絵本の読み聞かせ力を高める

今回、文学座の金沢映子さんを講師に招き、普段子どもたちに読み聞かせをする機会の多い可児市内の保育園・幼稚園で働く方々を対象に朗読ワークショップを実施しました。

まずは、ストレッチやシアターゲームなどをして緊張をほぐし、そして円になり自己紹介。参加者は「アナウンサーになったつもりで」、「選挙の候補者になったつもりで」とお題を出されながら自分の名前を言い、役割、意図、目的によって名前ひとつとっても発声の仕方が変わることを体感しました。

その後、発声練習。それぞれの言葉の成り立ちや、「あ」というひとつの言葉で無数の表現があることを学び、いよいよ本題の絵本に入っていきます。全員で読みまわしをして内容をつかんでいく中で、金沢さんから「滑舌の問題よりも、重要なのは、物語のバックボーンを自分と重ねながら読むこと。言葉をイメージしながら話すことが大事です。」とアドバイスをもらい、参加者の声が徐々に、空気感のある読み方へと変化していきました。

他にも子どもに絵本を読み聞かせるとき、まず下準備として1回読んでから、自分の中でどのように読むか企ててみる。単調にならないように声を変えてみる、どんな人なのかを設定し、イメージしてみる。絵本や色合いから想像してみるなどのアドバイスをいただきました。読み聞かせは、「自分（読み手）」と子ども（聴き手）の関係」になりがちですが、まずは「自分と絵本の関係」を大事にすることが重要なのだと参加者たちも感じたようです。

参加者には今回のワークショップで学んだことを、子どもたちの表現力や想像力を伸ばすために活用していただければと思います。



演劇っておもしろい！ プロから学ぶ演劇塾 2012

文学座が毎年実施している演劇ワークショップ。今回は初級者編と上級者編に分かれて実施しました。

楽しみながら基礎を学ぶ— 初級者編

日本を代表する劇団の文学座と地域拠点契約を結んで今年度で6年目。初年度より毎年実施している演劇ワークショップを今回、初級者編と上級者編に分けて実施しました。

初級者編では昨年度の市民ミュージカル「君といた夏〜スタンドバイミー可児〜」の脚本を手掛け、既に多くの市民と交流のある文学座の俳優で脚本家の瀬戸口郁さんを迎えて行いました。参加者は市民ミュージカルに出演した方々も多く集まり、とてもアットホームな雰囲気の中でワークショップは始まりました。シアターゲームで頭と体をリラックスしてから、テキストへと入っていきます。

テキストを使ったワークショップでは、俳優ならではの的確なアドバイスで、参加者たちは楽しみながら演劇の基礎となる様々なプログラムを体験していききました。

文学座の俳優と市民が演劇を通じて、人間的な交流を育む。たった2日間ではありましたが、仲間との再会や新しい出会い、講師との交流など、参加者にとって充実したワークショップとなりました。



初級者編

8/15.16 ala 演劇ロフト

参加：16才以上10人

講師：瀬戸口郁（文学座）

上級者編

8/18.19.24.25.26.31 9/1.2.8.9

ala 美術ロフト

参加：16才以上5人

講師：望月純吉（文学座）



作品作りのノウハウを学ぶ—上級者編

初級者編に引き続き、上級者編は、文学座地域拠点契約では初となる発表会を目的としたプログラムです。本ワークショップでは文学座の演出家 望月純吉さんを講師に招き、全10回という短い期間で、台本も何も無い状態から、参加者自身がゼロから作品を創作していきます。集まった5名の参加者は、まず自分がやりたい役を決め、年齢、職業、生立ち、抱えている問題、将来の夢や不安など、細かくその人格を掘下げていきます。

その後、その人物が観客に語るメッセージを台本に起こします。台本の骨格が出来たあたりから稽古を行い、参加者自身が創造したキャラクターを演じて、それを発表するという内容です。この一連の流れで参加者たちは、脚本作りから公演まで演劇を作る上で必要なノウハウを学んでいきました。

発表会では、緊張から思うような演技が出来ず「悔しい」といった感想もありましたが、その想いが次へと繋がる貴重な体験にもなりました。

今後はこの発展形として、ワークショップによる小規模な子ども向け作品等を創作し、可見市内各地で公演していきたいと思っています。



歌舞伎とおしゃべりの会

実演やワークショップによって、歌舞伎を中心に日本文化を体験し、
楽しみながら学ぶ講座です。

通年(計11回)

ala 映像シアター ほか

参加：延べ473人

講師：前期／吉田豊 後期／金森和子 歌舞伎体操／中村橋吾



歌舞伎からぐんと広がる世界

9年間続き、アーラの伝統となりつつある本講座。歌舞伎という一つの文化をキーワードに今年度も様々な催しを開催しました。

今年は地歌舞伎の県大会が10年ぶりにアーラで開催された特別な年ということで、前期は、地歌舞伎を特集した講師 吉田豊さんの解説講座や可児歌舞伎同好会と協働で衣裳や公演のパネル展示により地歌舞伎を紹介する「歌舞伎とおしゃべりサロン」など地歌舞伎に注目した講座を開催しました。素人とは思えない地歌舞伎の本格的な衣裳や舞台にすっかり魅了された参加者も多くいました。

後期の講師 金森和子さんの講座では、それぞれの回で、歌舞伎文字勘亭流書家 伏木壽亭さん、文学座俳優 加藤武さん、歌舞伎の小道具を扱う瀬田五郎さんの3人をゲストにお迎えしました。伏木さんの講座では、参加者全員が筆を持って勘亭流に挑戦するコーナーがあり、慣れない書に戸惑いながらも一生懸命取り組みました。完成した文字をみた伏木さんは紙の上にクルクルと◎。思わず笑顔があふれた嬉しい瞬間でした。

ここでは紹介しきれませんが、本講座では1年間を通して様々な講座を開催しています。アンケートには「これからも長く続けてほしい」、「毎回楽しみ」という声が多くあります。そんな声を励みに、毎回趣向をこらし、参加者がびっくりするような楽しい会を引き続き開催していきたいと思っています。



アーラユースシアター 「演ゲキッズクラブ」

演劇を通し、子どもたちの健全な育成を目指すプロジェクト。

通年（計 51 回） ala 演劇ロフト ほか

参加：小学 3 年生～中学 3 年生 27 人

公演：8/4.5	ala 演劇ロフト＜3 回公演＞	来場者数：計 300 人
8/6	可茂学園＜2 回公演＞	来場者数：計 50 人
10/20	下恵土公民館	来場者数：約 60 人
10/21	日本昭和村＜2 回公演＞	来場者数：約 160 人

講師：堀江ありさ

演劇で育む子どもたちの心

演劇を通し、子どもたちの健全な育成を目指して始まったユースシアターも今年度で 3 年目を迎えました。毎年夏に行う発表会では、絵本で有名な「泣いた赤おに」と落語芝居「じゅげむ」を 2 作品同時に公演しました。保護者の皆さんにサポートスタッフとして道具や衣裳の製作から照明や音響の操作まで携ってもらい、親子手作りの舞台として成功を収めました。また、作品「じゅげむ」は障がい者施設や公民館など 3 か所出張公演を実施。「子どもたちの元気な姿に感動した！」などの感想も多数寄せられ、好評を博しました。

また今年度はユースシアター初となる試み、可児市にある宿泊可能な研修施設 わくわく体験館での演劇合宿をはじめ、クリスマスパーティーや犬山市にある野外民族博物館リトルワールドでの遠足など、様々なレクリエーション企画を実施。子どもたちにとってとても思い出深い一年を過ごせたと思います。

今後はさらに子どもたちが真剣に演劇と向き合える環境を作り出していくことで、演劇の魅力や楽しさを伝え、心豊かな人間に育っていくことを期待しています。

森山威男ドラム道場

市内在住のジャズドラマー森山威男さんを講師に迎え、
基礎から実践まで学べるドラム講座です。

毎週月曜日(計45回) ala 音楽ロフト 講師：森山威男

参加：道場生延べ223人 セッション観客 計165人

トッププレイヤーから受ける質の高いレッスン

世界的ジャズドラマー 森山威男さんによるドラム講座。個人レッスン方式での丁寧な指導で、高度なテクニックの裏側にある基礎を実践的に学ぶことができます。レッスンの内容は、確実にテクニックが身に付くよう個人のレベルや目的に合わせて考えられた森山さんオリジナルのもの。

まず初めに基本的な叩き方から様々なリズムの叩き方まで基礎を身に付け、さらに楽譜を使って基本的な演奏パターンを習得。その後、ドラムセットを使っての練習は受講生個々の経験に合わせて考えられており、受講生たちは練習を通して、交流を深めながら切磋琢磨しています。

また今年度は特別編と題し、実践経験の機会として他楽器とのアンサンブルを学ぶ「公開セッション」を3回実施しました。多くのお客様を前に、打合せ・リハーサルなしのぶっつけ本番の公開セッション。プロの演奏家とのセッションで日頃練習で身に付けたテクニックを披露する機会は、刺激的な時間であるとともに、1人で練習しているだけでは得られない発見があり、今後の課題を明確にする機会になっています。

本講座で学び、力をつけた道場生たちが様々な場所で活躍する日も近いかもしれません。

町が元気になる処方箋

現代の社会の問題・課題に向き合い、地域の公共劇場の役割を市民と共に考える座談会。

8/6 ala 映像シアター

参加：52人

出演：平田オリザ、古賀弥生、衛紀生

文化芸術が果たせる役割を知る

アール館長 衛紀生とゲストが地域の公共劇場としての役割を考える公開座談会。今年度のテーマは“子どもと文化”。ゲストには、初年度から連続でご出演いただいている演出家の平田オリザさん、そして NPO「アートサポートふくおか」の古賀弥生さんのお二人をお迎えしました。

座談会では、古賀さんが「アートサポートふくおか」で行なってきた子どもの文化芸術体験の話が中心になりました。学校に芸術家を派遣し、そのシステム作りにも取り組む活動の中で、古賀さんは「芸術家を派遣すると、教室にドキドキ、ワクワクのうずまきが発生する」と実感を話して下さいました。ワークショップで子どもたちと接する機会が多い平田さんは芸術が子どもたちに自信を持たせるきっかけになると語りました。実体験を交えたトークに、来場者も真剣に耳を傾けている様子でした。

アンケートでは、「ワークショップのできるアーティストを目指したくなりました」、「学校から演劇教育の依頼が多くなっている」という声があり、子どもたちと文化芸術の繋がりが、今後益々必要になっていくものだと感じる座談会になりました。

来年度以降も市民のみなさんと共に考え、歩んでいくヒントとなるような座談会を開催していきます。





新日本フィル 音楽クリニック

プロの演奏家から直接指導を受けることにより、
地域で活動する子どもたちの技術向上はもちろん、
演奏の楽しさを知ってもらう講座です。

10/8

トランペット／ala 音楽ロフト 9人

クラリネット／ala 演劇ロフト 10人

フルート／ala 美術ロフト 7人

参加：帝京可児中学校・西可児中学校・東可児中学校・
中部中学校・蘇南中学校の吹奏楽部の生徒 26人

講師：新日本フィルハーモニー交響楽団

首席トランペット奏者 服部孝也

副主席クラリネット奏者 澤村康恵

エキストラフルート奏者 北川森央



プロから学ぶ贅沢な音楽の授業

新日本フィルで活躍する演奏家たちに、直接演奏のテクニックを指導してもらえるこの企画。今年度は、可児市内5校の中学校の吹奏楽部の生徒たち26人が参加しました。指導いただいたのは、首席トランペット奏者の服部孝也さん、副主席クラリネット奏者の澤村康恵さん、エキストラフルート奏者の北川森央さんの3人。基礎練習を中心に、美しい音を出すテクニックをたっぷり教えて頂き、熱心にメモを取る参加者からは今後の練習に生かそうという熱意が伝わってきました。講師陣の教えは参加者のこれまでの考えを驚きとともに変えてしまうという場面もありました。例えば、フルートではこんな場面がありました。フォルテは頑張って強い音を出すことと捉えられがちですが、大切なことは「リラックス」とのこと。体を開くことで伸びやかなフォルテも、力強いフォルテも出すことが出来るのです。さらに、体の動きや位置、つまり姿勢を意識することはより良い音に繋がるという貴重な教えを聞き参加者は「なるほどー！」と実践をもとに納得の様子でした。

締めくくりは、参加者による発表会。皆さん、緊張気味の様子でしたが、一つひとつの音を丁寧に、講師陣から教わったことを意識しながら演奏し、その表情は真剣でまっすぐでした。最後に講師陣の演奏を披露いただき、音楽による交流が生まれた一日となりました。

みんなで 一つの作品を 創り上げる喜び

アーラは「違い」を「豊かさ」に変える装置です。世代や性別、国籍、文化、障がいの有無といったたくさんの「違い」を持った人々が出会い、語り合い、解り合うためのプログラムを実施しています。「違い」を個性として認め合うことで、それは「豊かさ」に変わっていきました。

そして稽古や活動を通して参加者の間に芽生えたものは、確かな“絆”でした。

- ・多文化共生プロジェクト 2012 公演『顔／ベルソナ』
- ・市民参加公演 オーケストラで踊ろう！『新世界』
- ・アーラ映画祭 2012
- ・新ヤングミュージックフェスタ vol.4
- ・ala Collection vol.5『高き彼物』サポーター活動



演劇やダンスの力で仲間づくりを

今年度も、「ドキュメンタリー演劇」を手法とし、参加者それぞれが自分自身の人生や想いを持ち寄り共有しました。異なるコミュニティに属しているために交流が少ない方たちが作品作りのプロセスを経て、お互いを知り理解し仲間になっていく姿が多くみられ、新しい仲間をつくる場となりました。

多文化共生 プロジェクト 2012 公演『顔 / ペルソナ』

可児市や周辺地域の日本人・外国人が、「違い」を超えて一つの演劇作品をつくりあげるプロジェクトです。

稽古（インタビュー、WS 含む）：5 月～10 月（計 43 回）

参加：キャスト 27 人・市民サポーター 9 人

公演：10/6・7 ala 小劇場 <2 回公演>

来場者：計 269 人

構成・演出：田室寿見子

振付・演出：じゅんじゅん

映像：岩井成昭 演出助手：前嶋のの

「違う」ことを受け入れ、人はつながっていく

今年度は、参加者の半数近くを中高生が占め、家庭環境や学校生活において様々な事情を抱える若い参加者が多くみられました。本プロジェクトでは、作品を創るというプロセスにおいて他者との交流、さらには連携、理解が不可欠です。そこには自然と相手を尊重する姿勢や、共通の目標を達成するために約束を守るなどの社会性が求められ、回数を重ねるごとに参加者に身についていきました。それらの「変化」は数値化や可視化することは不可能ですが、公演として作品が完成し、お客様から拍手を得たことから成果を実感として得ることができたと思います。

子どもたちの内面に起こった変化を正確に掴むことは難しいですが、日本に来て間もなく、言葉も分からず、さらには家庭が安定していない外国籍の子どもたちが、稽古を通じて表情を変化させ積極的になっていく姿からプラスの力を大いに感じ取ることができました。



公演後には、「差別なしで、色々な人と触れ合うべきだとこのプロジェクトで学びました」、「子どもにはとても大事な経験でした。このプロジェクトは外国人だけじゃなく、日本人が一番心が変わる」などの意見が参加者から聞かれました。参加した子どもたちは、自身の夢を語ったり、次回も参加したいといった前向きな気持ちを持つことができ、本プロジェクトの醍醐味は、このような心の変化をもたらすことができるかだと実感しました。若い参加者が創造的な活動を通じて日々を充実させ、社会にある多様性に触れることができたことはとても大きな意義があったと思います。

来年度で6年目を迎える本プロジェクト。地道な活動を通じて少しずつですが、外国人コミュニティが認知されてきています。今後は、他団体との連携を深め、地域の多文化共生に関する課題解決方法の一つのアプローチとして成立するようにさせていきたいです。





市民参加公演 オーケストラで踊ろう！『新世界』

クラシック音楽とコミュニティーダンスの融合による新しい芸術表現を行うことで、市民による芸術活動の活性化を図る市民参加型公演。

稽古：12月～3月＜市民ダンサー／計36回・可児交響楽団／計20回＞

公演：3/10.11＜2回公演＞ ala 主劇場

来場者：計1,279人

参加：市民ダンサー／51人・可児交響楽団／62人・市民サポーター／7人

振付・構成・演出：井手茂太

指揮：古谷誠一

演出アドバイザー：Chris Hill

振付助手：依田朋子、山田茂樹



出演者たちが体験した「新世界」とは

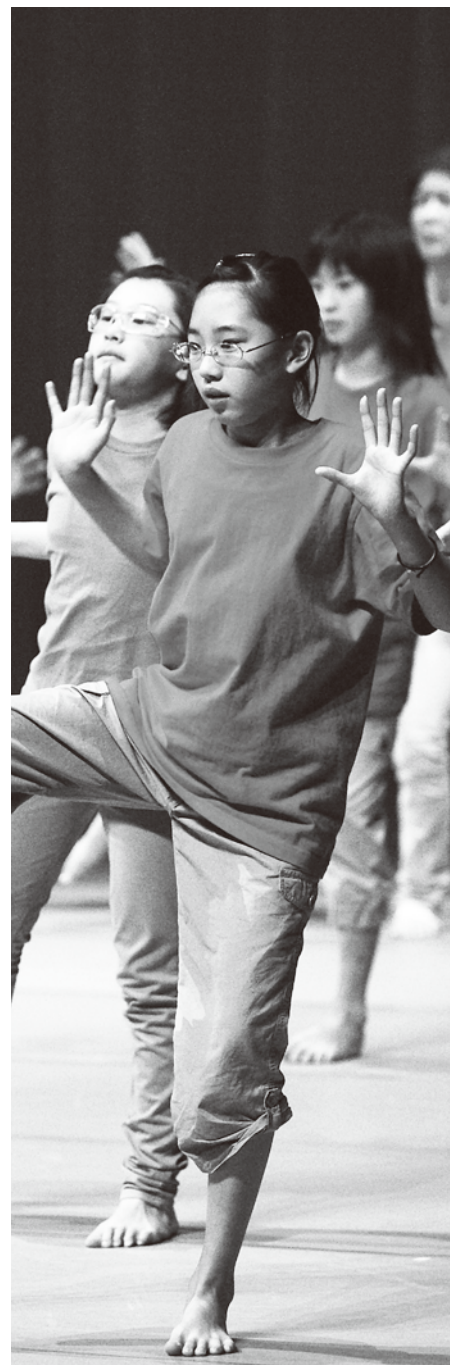
コミュニティーダンスとオーケストラを融合した全国的に見ても珍しい市民参加公演 オーケストラで踊ろう!『新世界』。この企画が本格的に始動したのが振付家の井手茂太さんがアーラを訪れた2012年4月。それから約11ヵ月間、ダンサーもオーケストラも全て可児市民というこの企画は、実に多くのスタッフに支えられながら大切に作られていきました。

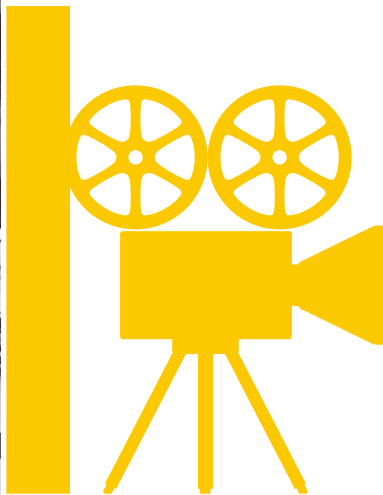
2012年の11月に出演者オーディション。続く12月からは市民ダンサーの稽古が本格スタートされました。それとは別に可児交響楽団の演奏練習やサポートスタッフによる関連企画の準備など、それぞれが公演成功に向けて着々と準備を整えて行きました。

井手さんの稽古は、あらかじめ決まった振付があるわけではありません。出演者を見て、その個性を引き出した遊び心溢れる振付をその場で生み出していきます。緊張感ある中でもユニークな振付で稽古場内は笑いが絶えませんでした。名前も顔も知らない出演者同士が、稽古を重ねるにつれて、徐々に同じ仲間としてひとつにまとまっていくことも市民参加の大きな魅力です。参加者同士で声を掛け合って、自主稽古をしたり、休みの日などは仲間同士で遊びにいったりと、稽古以外でも活発に交流を育んでいきました。それは、「舞台を成功させたい」という出演者一人ひとりの想いが出演者同士の心を結び付け、強い連帯感として一つにまとまっていったのです。

しかし稽古は楽しさだけではありません。学校や仕事を抱える出演者にとって、約4ヵ月間稽古に通い続けることは大変な苦労があったと思います。そんな二足のわらじを履きながら仲間と迎えた本番日。市民ダンサーと可児交響楽団の総勢113人による壮大なアンサンブルは観客を魅了し、会場は割れんばかりの拍手に包まれました。

終演後に見せた出演者の達成感に満ちた一人ひとりの笑顔が、この公演の全てを物語っているように感じます。それは劇場という特別な空間で出演者と観客が「感動」を共有し、普段では体験できない、まさに“新世界”を全身で感じたからだと思います。





アーラ映画祭 2012

市民で結成された映画祭実行委員会が企画から運営までこなし、優れた作品を上映し、映画の素晴らしさを広める活動をしています。

通年（計 16 回） 映画祭実行委員会 23 人

プレ上映会：5/25 ～ 5/28 作品数：4 作品 上映回数：12 回

映画祭：10/4 ～ 10/14 作品数：11 作品 上映回数：25 回

ala 小劇場・映像シアター 来場者：計 4,078 人

仲間とつくるみんなの映画祭

可児市には映画館がないことから、市民が映画を楽しめる環境が十分ではありませんでした。そこで2006年に市民へ呼び掛けて結成したのが、アーラ映画祭実行委員会です。今年度で6年目、新しいメンバーも加わり老若男女23人の実行委員が、それぞれの得意分野を生かし活動しています。

会議の中で挙がる映画は年間で100本近く。その中から、上映される作品は15作品。それぞれの映画に対する想いを語り合いながら、お客様に観てもらう作品を絞っていきます。お互いの熱い想いがぶつかり合い、時には大激論になることもしばしば。活動は作品選定にとどまらず、チラシ配布、期間中のイベント企画、スクリーンの組立、ゲスト対応、チケットもぎりなど多岐にわたります。

今年度はトークショーのゲストとして監督3人をお招きし、映画に関するお話を聞くことができました。トークショー終了後には、ゲストを交えてお客様同士が交流するシネマカフェを開催し、大いに盛り上がりました。

1年間に渡る活動は大変なものですが、お客様からの「いい映画をありがとう」、「いつも楽しみにしています」の言葉をいただくと、関わった分だけ喜びに変わります。「映画が好き」という同じ気持ちを持った仲間たちで、来年度も楽しい映画祭をつくっていきたいと思います。





幅広い世代・ジャンルのバンドが 競い合う音楽イベント

地元アマチュアミュージシャンのステージとして15年続き、新体制になってから今年度で4年目になる本イベント。今回は経験が浅いながらも将来の大物を予感させる高校生バンドや、人生の積み重ねがにじむオジ様バンド、そして地元を代表するバンドたちが出演しイベントを盛り上げました。

ただのコンサートでは終わらない 実行委員の創意工夫

実行委員会発案のもと、スポーツでおなじみのヒーローインタビューを地元協賛企業のロゴをバックに各バンドが受け、その映像を舞台転換時に投影する演出を実施。さらに今年度はお客様を楽しませる企画として、クリスマスにちなんだサンタにまつわるショートムービーを作成。全6本を転換ごとに上映して行きました。イベントの運営のみならずムービーの撮影に一丸となって取り組んだことで、実行委員の絆が大きく深まりました。

地域のバンドが成長し、交流する場

出演バンドは、充実の音響や照明、広いステージに立てる代わりに、事前打ち合わせや舞台スタッフとの綿密なリハーサルという“洗礼”を受け、「ステージに立ち、聴かせること」を考え、学びます。そして今回、可児市にある名城大学の学生が出演だけでなく、実行委員メンバーとしても加わり、ムービーの撮影時に数十人のエキストラを集めるなど大きな戦力を発揮してくれました。これによりバンド間の交流だけでなく地域の若者たちを巻き込んだイベントとなりました。来年度からはイベント名を改め、出演バンドがさらに充実し、お客様が楽しめる、より大きなうねりを生む体制を構築していきます。

新ヤング ミュージック フェスタ vol.4

出演・運営して地域とつながる、アマチュアミュージシャンのための多世代、多ジャンルミュージックフェス。

通年（計30回）新ヤングミュージックフェスタ実行委員13人

公演：12/23 ala小劇場 来場者：208人

出演バンド：8バンド 協賛：11社



公演を盛り上げる“縁の下の力持ち”

アーラコレクションシリーズはプロの俳優とスタッフが可児市に約1ヵ月半滞在し、演劇作品を創り上げ、全国に発信するプロジェクトです。このプロジェクトを支えているのが、一般公募により結成された市民サポーターです。今年度は31人が集まり、精力的に公演を盛り上げてくれました。

まずは多くの方に公演を知ってもらうために、館内に展示パネルを設置しました。公演の1ヵ月前から案を出し合い、時間をみつけて製作しました。今回の作品『高き彼物』は静岡県の田舎町が舞台。イメージが伝わるよう茶畑を立体的に表現し、多くの来館者の目を楽しませていました。

さらに関連企画として、「わが師」をテーマに短歌を一般公募し、短歌展を開催しました。この企画で、今まで演劇にあまり関心のなかった市民が間接的に作品に関わることができ、『高き彼物』を広くPRすることができました。

市民サポーターの活動は広報活動だけに留まりません。稽古場のケータリング管理を交代で行い、サポーター手作りの郷土料理やパン、お菓子などを差し入れ毎日の稽古もサポートしました。また、「カレーbuffet」と題し、各家庭のカレー、おかずなどを持ち寄って出演者と昼食を一緒にとるなど、明るい稽古場作りにも一役買っていました。

そして可児公演最終日には、可児での日々を思い出せるようなアルバムも作成。出演者に手渡しし、東京他の地方公演へのエールを送りました。

この活動を通して、サポーター同士がつながり、今でも一緒に観劇に出かけるなど、交流を深めています。

ala Collectionシリーズ vol.5 『高き彼物』サポーター活動

可児発・全国発信の舞台の魅力を市民と共有し、共に作り上げる活動です。

4/21～6/30（計38回） ala 製作室・演劇ロフト ほか 参加：31人



絆の大切さを知る



人は一人では決して生きてはいけません。まわりには家族や友達、恋人…大切な人たちがたくさんいます。しかし日々の生活の中でつい忘れがちになってしまう絆の大切さ。アーラでは絆の再確認をしてもらえる場を提供することで、素敵な思い出作りとともに“つながること”の必要性や“思いやり”のころを感じてほしいと考えています。

- ・被災地アウトリーチ vol.2 エバーピンクプロジェクト
- ・アーラ・イルミネーション
- ・ala みんなの同窓会 ～年に一度の交流会～

被災地アウトリーチ vol.2 エバーピンクプロジェクト

被災体験をした子どもたちの心を解き放つため、大きなキャンバスに思いっきり絵を描いてもらうワークショップを3ヵ所で行いました。

5/21 宮城県太白区長町 仮設住宅（あすと長町ニュータウン） 40人

5/22 宮城県七ヶ浜町生涯学習センター10人・宮城県七ヶ浜町 仮設住宅 10人
延べ60人

アーティスト：佐藤健史（ライブペインター）

“桜の絵”に希望を込めて

現地に訪問してまず、絵を描くパネルに下地の白をペイントするところから始まりました。このパネルは、陸前高田市の避難所で仮囲いとして使われていたものが仮設住宅へと寄贈されたもので、本プロジェクトでぜひ使ってほしいと自治会長さんから提供されたものでした。これを地元、宮城大学の学生さんに協力していただき、下地をペイントした後、仮設住宅で暮らす大工さん数人にお手伝いをしてもらいながら設置作業を行いました。

開始時間になるとまずは宮城県出身・在住のライブペインター 佐藤健史さんによるデモンストレーションから始まり、縁起の良い龍の絵、そして今回のエバーピンクプロジェクトの名の由来の桜の絵が描かれました。

次に佐藤さんのデモンストレーションを真似して、パネルの下部分は小さい子どもたち、上の

空の青は大人たちと役割分担をしながら、その場にいるほぼ全員に参加してもらい、陸前高田のパネルに桜の絵を描きました。描いたこの絵は、仮設住宅の集会所で展示することになりました。

「去年は桜をじっくり見られなかったから、今年は2年越しの桜だね」とおっしゃった自治会長さんの言葉が印象的でした。震災の1ヵ月後ではまだまだ荒しさが続く中にあり、桜が開花してもそれを喜ぶ気にもなれなかったのでしょうか。被災地の方たちは、今年の桜の開花をいつも以上に待ち望んでいたのだと思います。

今回伺った仮設住宅の敷地付近にも今にも咲きそうな桜の木がありました。参加した方たちが、毎年桜が咲くたびに、みんなで描いた楽しかった体験を思い出してくれればと思います。

“子どもたちが楽しめるイルミネーション”を模索する

毎年、点灯式の参加者の中には、子ども連れのご家族が多くいらっしゃいます。そこで今年度は、イルミネーションの点灯式をより楽しんでもらうために、子どもたちを対象にしたサプライズ企画を実施しました。題して『ミニサンタを探せ!』。点灯式後、イルミネーションの中に隠れた手のひらサイズのサンタたちを時間内に見つけだすゲームに、参加した子どもたちは競うように探したり、また親子で仲良く探したりと、思い思いに楽しんでいました。サンタを見つけた子が「見つけた! みて! みて!」と、こちらに笑顔で走ってくる姿や、賞品のお菓子を兄弟で仲良く分け合っている姿は微笑ましく、参加した職員たちもあたたかな気持ちになりました。

また今年度は口コミで参加された方も多く、点灯式に参加された方が勧めてくださっているのだと実感し、とても嬉しく思いました。来年度は可児市内の保育園や幼稚園など子どもたちが集まる場所を中心に積極的な広報を行い、多くの方に知ってもらい、参加していただくことを目指します。

アーラ・イルミネーション

毎日1組のお客様にイルミネーションの点灯ボタンを押していただく「点灯式」を開催。素敵な思い出作りのお手伝いをしています。

11/24～2/6(計57日) ala 水と緑の広場 参加: 57組 248人



ala みんなの同窓会 ～年に一度の交流会～

アーラの市民参加事業に関わった市民、スタッフが年に一度の再会・交流を通じて絆を深める企画です。

2/11 ala レセプションホール 参加：80人

アーラでの出会いがつくる仲間の輪

毎年行っている大型市民参加事業・多文化共生プロジェクトに参加した市民、スタッフが年に一度再会し、交流する「ala みんなの同窓会」。公演して終わりではなく、この同窓会を通じて参加者同士の絆を深め、アーラでの経験や思い出をもとに継続的なコミュニティ形成を目指しています。



大人になっても集まれる場所

2008年度の市民ミュージカル「あいと地球と競売人」から昨年度の「君といた夏」、「多文化共生プロジェクト2012」まで、各公演ごとに当時の映像をプロジェクターで映しながらテーマ曲を歌ったり、踊ったりしました。その後、ワークショップ活動団体FunFan アーラがコミュニケーションゲームを企画してくれ、各プロジェクトの垣根を越えて入り混じって楽しい時間を共有できました。当時、小さかった子どもたちも年々、大きくなっています。何年たっても消えない絆、年に一度アーラで集まれる場所として今後も毎年開催していきます。

2012年9月14日(金) 中日新聞

役に深み 言葉に重み

可児の演劇塾生 集大成の発表会

可児市文化創造センターが八月から十回シリーズで開いた「表現者のための演劇塾」の発表会が同センターであり、五人の塾生が自ら作り出した役になり、それぞれの塾生がエ

きって言葉をつ紡いだ。演劇に興味を持つ人演劇に力や考え方を学べる講習。文学座の演出家、望月純吉さん

まとめるため、せりふの一言に「その人らしさ」を込める重みを考えた。発表会では約五十人の観客に、作り出した役になりきって、悩みや思いを伝え、温かい拍手が送られた。(斎藤明彦)



自ら設定した役になりきって演じることを学んだ塾生＝可児市文化創造センターで

2012年10月13日(土) 朝日新聞



塾一久さん(左)の朗読落語を楽しむ市民たち＝可児市の桜ヶ丘公民館

文学座俳優招き 朗読落語を公演

可児市の文化創造センター「アール」が、提携している文学座の俳優の塾一久さんを招き、11、12の両日、桜ヶ丘公民館や兼山公民館など計4カ所でおでかけ朗読落語公演をした。

11日にあった桜ヶ丘公民館での公演では、塾さんは「寿限無」など2題を披露した。公演用に独自の台本を用意した塾さんは、身ぶり手ぶりを交えて、巧みな話術で落語を熱演し、訪れた市民らの笑いを誘っていた。

アールでは、文学座と協力して2007年からおでかけ朗読公演を各公民館で実施しているが、朗読落語は初めて。「なかなか公演に足を運ばない市民に楽しんでもらえる企画にした」と話している。

言葉の響きを大切に

文学座俳優
金沢さん 読み聞かせを指導

可児

文学座俳優の金沢映子さんを招いた読み聞かせワークショップ（体験型講座）が十五日、可児市文化創造センターであり、市内の保育園や幼稚園で働く女性ら十人が絵本の読み方を学んだ。

朗読の出前ライブでも活躍する金沢さんは、文字を記号ではなく「イメージ」を持たせて発音するよう指導。受講者はアナウンサーや選挙の候補者になったつもりで自己紹介し、立場や目的によって話し方を変える必要があると体感。詩や絵本をテキストに、言葉の響きを大切にして「立体的な音」を心がけるトレーニングを積んだ。



「同じ言葉でもイメージで読み方は違う」と話す金沢映子さん。可児市文化創造センターで



田村直貴さん、響さんの演奏に合わせて合唱する子どもたち

プロの音色 園児楽しむ

可児に新日本フィル出張演奏

新日本フィルハーモニー交響楽団のメンバーらが4日、可児市の市立久々利保育園で出張演奏会を開き、園児93人がプロの演奏を楽しんだ。

同交響楽団は5年前、市文化創造センターと地域拠点契約を結び、それ以来、市内の学校や福祉施設などで出張演奏を行っている。この日は、バイオリン奏者の田村直貴さん（35）と、田村さんの弟で2007年ロンドン・ティボー国際音楽コンクールピアノ部門で優勝したピアニストの響さん（26）の2人が、マスネ作曲の「タイスの瞑想曲」などクラシックのほか、子どもたちに人気のアニメソングなどを披露し、園児たちが演奏に合わせて合唱した。

2013年3月5日（火） 読売新聞

2013年2月16日（土） 中日新聞

2013 年 3 月 12 日 (火) 岐阜新聞

可児市で「オーケストラで踊ろう!」上演 市民、自由な表現楽しむ



可児交響楽団の演奏に合わせて踊る参加者＝可児市下恵土、市文化創造センター・アール

可児市文化創造センター・アールの市民参加公演「オーケストラで踊ろう!」『新世界』が9、10の両日、同市下恵土の同センターで上演された。同センターの市民参加公演の第5弾。可児市交響楽団の演奏するドボルザークの「新世界より」に合わせて、約60人の市民が踊った。参加者は仕事や学校などの合間をぬって稽古を重ねてきた。参加者は「普段体験できないようなことができ

た」「見知らぬ人たちと作品を作り上げるのが楽しかった」と感想を語った。観客からも「表現の自由さに驚いた」など感想が寄せられた。
(広瀬文士)

新聞掲載記事一覧

日付	媒体名	掲載内容
4月7日(土)	朝日新聞	森山威男ドラム道場
8月9日(木)	中日新聞	町が元気になる処方箋
8月25日(土)	中日新聞	平田オリザの「対話を考える」モデル授業
9月14日(金)	中日新聞	演劇っておもしろい! プロから学ぶ演劇塾2012
9月28日(金)	中日新聞	アール映画祭2012
10月13日(土)	中日新聞	alaおでかけ朗読公演
10月13日(土)	朝日新聞	alaおでかけ朗読公演
10月18日(木)	中日新聞	市民参加公演 オーケストラで踊ろう!『新世界』
10月23日(火)	岐阜新聞	新日本フィル 音楽クリニック
10月24日(水)	岐阜新聞	alaおでかけ朗読公演
12月4日(火)	中日新聞	アール・イルミネーション
2月13日(水)	岐阜新聞	新日本フィルおでかけコンサート
2月14日(木)	中日新聞	新日本フィルおでかけコンサート
2月16日(土)	中日新聞	プロの俳優による朗読ワークショップ
2月19日(火)	岐阜新聞	市民参加公演 オーケストラで踊ろう!『新世界』
2月24日(日)	岐阜新聞	プロの俳優による朗読ワークショップ
3月5日(火)	中日新聞	ホームカミング「家においでよ!」
3月5日(火)	朝日新聞	ホームカミング「家においでよ!」
3月5日(火)	読売新聞	ホームカミング「家においでよ!」
3月7日(木)	岐阜新聞	ホームカミング「家においでよ!」
3月12日(火)	岐阜新聞	市民参加公演 オーケストラで踊ろう!『新世界』
3月23日(土)	中日新聞	市民参加公演 オーケストラで踊ろう!『新世界』

パートナーグッズ紹介



ピンバッチ 500円(税込)



シリコンバンド 500円(税込)

プロジェクトを応援したい

パートナーグッズ

プロジェクトの存在が見えるように

「ala まち元気プロジェクト」への賛同の気持ちをグッズとして身につけることで市民の皆様に応援していただいています。

2012 年度 実績報告

	プログラム	実施回数 (*印=WS・稽古含む)	実施会場数 (アール以外)	参加人数 (延べ人数)	公演来場者数
1	新日本フィルおでかけコンサート	6	6	445	-
2	alaおでかけ朗読公演	4	4	163	-
3	ホームカミング「家においでよ！」	1	1	100	-
4	平田オリザの「対話を考える」モデル事業	1	0	30	-
5	プロの俳優による朗読ワークショップ	4	0	51	-
6	演劇っておもしろい！プロから学ぶ演劇塾2012	12	0	70	-
7	歌舞伎とおしゃべりの会	11	0	473	-
8	アールユースシアター「演ゲキッズクラブ」	51 *	3	933	570
9	森山威男ドラム道場	45	0	223	165
10	町が元気になる処方箋	1	0	52	-
11	新日本フィル 音楽クリニック	1	0	26	-
12	多文化共生プロジェクト2012 公演『顔／ペルソナ』	45 *	0	579	269
13	市民参加公演 オーケストラで踊ろう！『新世界』	58 *	0	2,108	1,279
14	アール映画祭2012	53 *	0	477	4,078
15	新ヤングミュージックフェスタvol.4	31 *	0	433	208
16	ala Collection vol.5『高き彼物』サポーター活動	38	0	240	-
17	被災地アウトリーチvol.2 エバーピンクプロジェクト	3	3	60	-
18	アール・イルミネーション	57	0	248	-
19	alaみんなの同窓会 ～年に一度の交流会～	1	0	80	-
		423	17	6,791	6,569



あとかき



「人間の家」の意味するものー

人間という存在に「真摯」であること。
「いのちの格差」のない社会を目指すこと。

ala まち元気プロジェクトがはじまって4年。

成果は決して形として目にみえるものではありませんが、
このプロジェクトで年齢も考えも違う、
様々な人たちがつながり、その後も関係を築いています。
人の輪は確実に広がっています。

文化芸術には少なからず“心の変化”を起こす力があるー。
そう信じて、アーラはこれからも人々に向き合いながら、
このプロジェクトを進めていきます。



KANI PUBLIC ARTS CENTER *ala*

可児市文化創造センター

alaまち元気プロジェクトレポート2012

発行：公益財団法人 可児市文化芸術振興財団

〒509-0203 岐阜県可児市下恵土 3433 番地 139

TEL：0574-60-3311 FAX：0574-60-3312

発行日：平成 25 年 5 月